

横にはなつたもの、雨には濡れて居、殊には冷氣も一入増して、身體はふるく慄へて居る。

昨夜よりも尙は辛いなア。

それはさうさ、昨夜は火なんぞを焚いたから。

又火でも焚かうか。

だツて焚くものも焚く場所もないじやないか。

困つたなア。

如何程困つても更らに妙案も浮ばないので、仕方なく諦らめて横になつて。

轉々殆んど一時間ばかりは煩悶して居たが、それでも疲れと睡魔に襲はれて、何時とは知らずに眠つたのであらう、眼が覺めれば夜ははのくくと白んで居た。

雨は名残なく晴れて、二ツ三ツ四ツの星影が、未だ西の空に瞬いて居る。

今日は大丈夫天氣だよ。

と喜び勇んで、未明より歩き出した。

二三里も歩いたと思ふ頃、澁川といふへ出た、懐中には早や一圓ばかりさへなければ、高崎へ往けば磊々子の友人が歸つて居る筈故、氣を強くして、兎に角朝飯をしたゝめるべく茶店へ飛び込んだ。

もう前橋までは僅かのこと故、格別金の要ることもないからと、茲に一圓の若干を割いて酒と飯とをたらふくを詰め込んだ。

久しぶりで酒の味、嘗めたので、磊々子も我も甚だ元氣よく、勘定を済まして往來へ出れば、旭日は早や餘程上つて、赫々とした光が山や野の凡てを染めて、草や木は生々として甦へつたごとく、而して我等も又更らに甦へつたごとく。

ふらりと前程に進みつゝ、山や野の美事なる景色を賞しながら、疲れも忘れつ只管に進めば、早や正午頃には前橋へ。

茲には縣廳もあれば學校もあり、兎に角群馬縣の都會であれば、見物するの價値もあ

横にはなつたものゝ、雨には濡れて居、殊には冷氣も一入増して、身體はふるゝ慄へて居る。

昨夜よりも尚は辛いなア。

それはさうさ、昨夜は火なんぞを焚いたから。

又火でも焚からうか。

だつて焚くものも焚く場所もないじやないか。

困つたなア。

如何程困つても更らに妙案も浮ばないので、仕方なく諦らめて横になつて。

轉々殆んど一時間ばかりは煩悶して居たが、それでも疲れと睡魔に襲はれて、何時とは知らずに眠つたのであらう、眼が覺めれば夜はほのくくと白んで居た。

雨は名残なく晴れて、二ツ三ツ四ツの星影が、未だ西の空に瞬いて居る。

今日は大丈夫天氣だよ。

と喜び勇んで、未明より歩き出した。

二三里も歩いたと思ふ頃、澁川といふへ出た、懐中には早や一圓ばかりさへなければ、高崎へ往けば磊々子の友人が歸つて居る筈故、氣を強くして、兎に角朝飯をしたゝめるべく茶店へ飛び込んだ。

もう前橋までは僅かのこと故、格別金の要ることもないからと、茲に一圓の若干を割いて酒と飯とをたらふくを詰め込んだ。

久しぶりで酒の味 嘗めたので、磊々子も我も甚だ元氣よく、勘定を済まして往來へ出れば、旭日は早や餘程上つて、赫々とした光が山や野の凡てを染めて、草や木は生々として甦へつたごとく、而して我等も又更らに甦へつたごとく。

ふらりくと前程に進みつゝ、山や野の美事なる景色を賞しながら、疲れも忘れつ只管に進めば、早や正午頃には前橋へ。

茲には縣廳もあれば學校もあり、兎に角群馬縣の都會であれば、見物するの價値もあ

らんと、町端れから仔細に見物しながら、右に往き左に折れ、隅から隅と、殆んど歩
きつくして、漸く停車場に至れば、早や構内の時計は午後三時を打つた。
さすがは縣下の都會であるだけ、停車場の雑沓は一通りでない、我等は構内の一隅に
小さくなつて、群集の視線と避けて居た。
何うする磊々子、之から高崎まで歩かうか、或は之から汽車に乗つて往かうか。
さうだな、もう殆んど野宿旅行も終つたから、之から汽車に乗らうよ。
そんならそうしようよ。

と、茲に相談を決して、汽車に乗るべく切符を購へば、餘す所は僅かに十錢銀貨が一
ツ。

高崎へ着いたのは午後四時頃であつた。

茲まで来ればもう大丈夫、薦も笠も必用はないから捨て、往かうじやないか。

と餘りに異様な風采に磊々子の友人を驚かすも妙でない、態と遠慮して言へば。

馬鹿言ひたまへ、之が我々に價值のある所じやないか、捨てたまるもんか。

そんなら紀念として保存でもして置くかい。

そうさ、大に紀念として珍重すべきもんだ、幾多の風雨に晒されて、以つて我々に忠
大なる助力を與へたのだから。

義なものかな。

大に然りさ。

と、二人相も不變薦を纏ふて、高崎の市中を練り歩きつゝ、右に折れ左に折れて、漸
く目指す家へ。

その家に到れば、磊々子の友人は切りに珍らしがつて、水を出すやら草鞋を脱がせる
やら、勿體ない待遇。

足を洗つて座敷に導かれ、ば、今更我等の風采が耻かしく、我れ一人のみ赤面して居
れど、磊々子は一向平氣なもの、之は僕の友人だから、と紹介するに、ハア左様で

すか、初めて、など、惜れもせぬお世辭を振り撒いて、やがて挨拶も済めば、酒が出る肴が出る、東京以來の御馳走。
その夜は久しふりで穩かな夢を結び、翌日になつて汽車賃を頂戴するやらお土産を頂戴するやら。
そのまゝ、汽車に飛び乗つて東京へ。

野宿旅行 終

明治三十五年八月二十九日印刷
明治三十五年九月一日發行

(野宿旅行)
正價二十五錢

著 者

鐵 脚 子

發 行 者

岩 崎 鐵 次 郎

印 刷 者

日 置 市 二

印 刷 所

小 川 印 刷 所

著 作 所 有 權

東京市神田區鍛冶町三丁目一番地
東京市神田區鍛冶町三丁目一番地

發 兌

東京市神田區鍛冶町十七番地
電話本局 三〇六七番

大 學 館

池田錦水君著
女心の解剖
 各社各面
 正價 三十錢
 郵税 四錢

緒言
 解剖の順序
 容貌美人十人並醜婦
 年配老婆一年増新造
 風土關西婦人關東婦人
 人海邊婦人山田
 園婦人都會婦人
 職業女教師女藝師
 匠歌舞音曲の師
 看護婦按摩師
 髮結女工女外母
 下女役者娘
 洋妾見物藝人
 義太夫娼妓鴉片母
 妻酌婦賣淫婦
 義女將令嬢女學生町
 處女阿魔
 娘外婦人後家一貫の心情
 緒論(婦人一貫の心情)

墨堤隱士著
日本富豪の家
 正價 廿五錢
 郵税 四錢

三井家の家憲
 松屋呉服店の家憲
 大丸の家憲
 中澤家の家憲
 山本家の家憲
 升本家の家憲
 鴻池家の家憲
 本間家の家憲
 岩崎家の家憲
 住友家の家憲
 安田家の家憲
 澁澤家の家憲
 白木屋呉服店の家憲
 菊池家の家憲

村上濁浪君編 寫真版數葉入

世界第一譚

目次大要

正價廿五錢 郵税四錢

◎世界第一瀑布の探險◎世界三大不思議
 ◎世界第一金剛石の來歴◎長壽者傳◎世
 界第一英雄シーザル◎古今大物盡◎奈良
 大佛◎世界漫遊記◎英國珍物博覽會◎世
 界第一義士墓と遺物◎赤穂義士の逸話◎
 世界一の力持と鬚男◎世界第一烈婦ジャ
 ンダーク◎世界名物膝栗毛◎世界第一餘
 談◎歐米の世界第一◎世界第一淑女徐世
 賓◎人類學上の世界第一◎世界第一高山
 比馬拉登嶽記等二十數件

村上濁浪君著

冒險旅行術

正價廿五錢 郵税四錢

冒險談としては、熱帶、寒帶、沙漠、高
 山、森林、溪谷、瀑布等猛獸怪鳥の彷徨
 ぶ巷、瘴烟毒霧の漲る處を極め、奇々怪
 々、壯快痛絶の材料を收む、且つ、敵地
 通行術、或は、登嶽の心得、渡航の準備、
 苟くも、冒險旅行を試みんと欲する者の
 爲めに必須の條件を詳悉したり、されば
 一讀多趣味なるのみならず、實行上有益
 無比の書なり。

原田東風君著 岡落葉君畫

野宿旅行

正價廿五錢 郵稅四錢

汽車に乗らず、汽船を藉らず、二本の毛
脛に七寸の草鞋、青天井に草枕、三個の
青年が、行人の眼を驚かして、奇行を演
じたる、滑稽無類の旅行記なり、消夏の
友として無比の珍本たるのみならず、世
の柔情者輩を警醒せしむるに足る。

原田東風君著 岡落葉君畫

奇談 貧乏旅行

正價廿五錢 郵稅四錢

囊中常に乏しければ、旅籠屋に樂々と寐
る事難く、風采汚ければ、往々行人に冷
遇せられ、菅笠一蓋、薦一枚を便として、
進めば愈々究し愈々究すれば一計生じ、
此に、果實盗人となり、橋錢の誤魔化し
となり、失策となり、遁走となり、奇談
百出、珍話頻に生ず、これ亦野宿旅行と
相併んで、消夏の好同伴、且つ旅行を企
つる者に無上の案内書なり。

墨堤隱士著 肖像寫真版入

大臣の書生時代

正價三十錢 郵稅四錢

明治の大臣三十六人が其書生時代に於け
る刻苦勉勵せる逸話、詩を吟じ
劍を舞はしたる奇談、總て短褐弊衣の壯
態を描き出して、面目躍如たり、大禮
服に勳章を帯びて威儀堂々たる
現今の風采と比較一番せば實に無比
の興趣を覺ゆのみならず、得難き
教訓と興奮を味ふ可し。

平野紫陽君著 岡落葉君畫

文學奇瑞譚

正價廿五錢 郵稅四錢

目次大綱

◎雨を祈り又雨を止めたる事◎疾病を癒
せし事◎禽獸草木を感せしめし事◎神人
唱和◎神人を感動せしめし事◎不吉を變
じて人の心を安からしめし事◎罪禍を脱
し又罪禍を招きし事◎人に侮られず且つ
品位を高めし事◎望を達する事◎名號を
得たる事◎恩賜に預る事◎位階を得たる
事◎他人の詩歌を應用する事
これを更に細目に分ちて數百事項

墨堤隱士著
岡落葉君畫

正價廿五錢
郵稅四錢

明治富豪致富時代

果報は 寐て待つと 棚の上の
牡丹餅は 雖も来らず 懐合
掌禮拜は 笑ふべきかな
明治の富豪家 素寒貧 なり、眞裸
かろの始めは 神の機敏潤大
なる眼識とは 此巨萬の財産を獲取せり
幸運か 僥倖か 本 五十萬圓以
書悉く之を説く 家の一覽表を附
録とす。

押川春浪君著
岡落葉君畫

正價廿五錢
郵稅四錢

世界怪奇譚續空中大飛行艇

「空中大飛行艇」を
愛讀せし諸君は 美人 飛行艇よ雲
漠々 霧濛
一大警報 巴里全市を震駭せしめ
空中飛行艇の事實を知る可し
行艇か 瘴烟毒霧 指して 美人
搜索の間に起る 怪事と 珍話
とは讀者殆ど五里霧中に迷ひ、肌粟を
生し手に汗を握り、動悸の静まる事な
るべし、已にして、東天旭日上り、大
波濤陸離として光彩を添ふる處、日
大飛行艇は、大勝利を博して歸りたり
市の大歓迎、局に到つて。

蛟龍子編

正價廿五錢
郵稅四錢

明治卅
五年三
月調査

男東京學校案内

遊學 第一方針は學校へ入學する
己の性能に應じたる學術を専修するには
先づ學校を選択せざる可からず、
東都の地學校の數頗る多く千餘に上るべ
きも、正當なるものは僅に十分の一に過
ぎず、これ通學青年の最も考慮せざる可
からざる最近の調査を 百三
十餘校を選みるの規則、名稱、經
験科目、修業年限等、責任を帯びて記述
せるものなり。
男女遊學者の爲には無比の案内者
無比の良友なり。

井上啞々君著
岡落葉君畫

正價廿五錢
郵稅四錢

遊學書生

著者の序文に曰く
本書を讀んでもし眼を怒らすものあらば
幸に墮落の淵に沈むの苦を免る書生さん
なる可し
本書を讀んでもし膽を潰すものあらば幸
に可愛息子を臺なしにする厄なき親爺さ
んなる可し
もし本書の文の拙なるを嘲り記述羨
足らざるを嘲るものあらばこれ羨
ても 焼ても 喰へぬ奴
なりと
本書は一個無邪氣無垢の青年が東都に遊
學中一の周囲の汚俗と悪友の誘導に依て
不識不知墮落する傾向を小説的に畫きた
るものにて新書生氣質と稱す可き書なり

長田偶得君著
岡落葉君密畫

三逸事
奇談 明治六十大臣

正價三十錢 郵税四錢

明治十八年内閣の改革以來大臣の職に上

つた**總計六十人**者例の健筆

を揮つて**大禮服と拔**き去つた**眞**

裸其儘一讀噴飯**抱腹絶**

倒

岩崎徂堂君著
岡落葉君密畫

三
中江兆民奇行譚

肖像筆蹟挿入 正價廿五錢 郵税四錢

兆民居**一世の奇才**なり、奇言

奇行世を駭し、舌鋒劍の如く活動雷の如

し、嗚呼此**不治の病**に罹つて病

今にして**奇言奇行**を蒐め以てこ

居士が**奇言奇行**れを剖闕に附
するは聊か、著者の感ずる所あればな
り。

宮崎來城君著

鄭 成 功

正價卅五錢 郵税四錢

鄭成**國姓爺**の名を以て從來稗史小
功は日本人に深く記憶せられ演劇に仕組
まれたり、而かも未だその**完全な**
實傳あるを見ず

宮崎來城先生嘗て**支那臺灣を遊歴**し

珍奇斬新の材料と頗る豊

富此に先生、**謹嚴**而かも**瑰麗**の
筆硯を新にし、**謹嚴**而かも**瑰麗**の
筆硯を新にし、**謹嚴**而かも**瑰麗**の

を揮つて鄭成功一篇を著さる、これ先生
が**最も苦心の餘**の以て青
著中**最も苦心の餘**の以て青
が**最も苦心の餘**の以て青
年子**好讀本**たるを期せられたり。
弟か**好讀本**たるを期せられたり。

生田葵山人著

貴 族 の 戀

正價參拾錢 郵税四錢

生田**思想豊富**にして筆力**青**

葵山氏**思想豊富**にして筆力**青**
年作家中**天才**の名あり

貴族の戀一篇は葵山氏か苦心慘憺の作な

り、**上流社會の戀愛**を描

運筆極め**妙齡芳顔の一令**

嬢は二箇の紳士を蹴弄する所の如き**神**

手の感あり

池田錦水君著
岡落葉君畫

定價廿五錢
郵稅四錢

無錢修學

本書の目的は青年が苦學力行を獎勵するに在り、因循姑息の念を除去するに在り、獨立自活の法を教ふるに在り、目次左の如し

- 第一 立志 郷關を出つ
- 第三 雇店 店の出逃
- 第五 就學 大難の失敗
- 第七 文字 知らぬ大漢學者
- 第九 乞食 小僧の貧家捜し
- 第十一 糞尿 坊主の仲間入
- 第十三 無資本の獨立營業
- 第十五 車夫 活
- 第十七 精神一到 何事か成らざる
- 第二 巡查 相手に大氣焔
- 第四 無錢 就職の第一着
- 第六 空腹 苦痛
- 第八 立ん坊 自ら助くる者を助く
- 第十 三托鉢 坊主の案内
- 第十二 空前 絶後の狼狽
- 第十四 意外 の大珍事
- 第十六 暗 中の拔刀

附録 學生自活法

池田錦水君著
小山榮達君畫

定價廿五錢
郵稅四錢

奧様と嬢様

奧様

嬢様

- 其一 奧様如何
- 其二 經濟
- 其三 技能
- 其四 理想
- 其五 嗜好
- 其六 娛樂
- 其七 滑稽
- 其八 言語
- 其九 動作
- 其十 職務
- 其十一 社交
- 其十二 奧様に寄す
- 其一 嬢様如何
- 其二 世間的智識
- 其三 學術的智識
- 其四 藝術的智識
- 其五 希望
- 其六 嗜好
- 其七 遊戯
- 其八 舉止
- 其九 言語
- 其十 實際
- 其十一 交際
- 其十二 將來
- 其十三 嬢様に寄す

池田錦水君著
岡落葉君畫

定價廿五錢
郵稅四錢

戀の一年有半

(版再)

一年有半に於ける戀愛は如何に多様
に如何に夢幻に人情の波瀾
常なく浮世の轉換極なきを
活寫して、讀む者先づ仙境に遊ぶの感あり、
已にして涕淚滂沱禁ずる能はざる可し。

戀愛の原書を知つて、まだその疑ひあるもの數多と寫本の中
先づ第一に本書を繕いて可なり。

池田錦水君著
小島冲舟君畫

定價廿錢
郵稅四錢

婦人と戀愛

(版再)

目次

- | | |
|-----------|------------|
| 第一 婦人の通有性 | 第二 人生と戀 |
| 第三 戀の發動 | 第四 一時的戀愛 |
| 第五 虚誇的戀愛 | 第六 着實的戀愛 |
| 第七 令夫人の戀 | 第八 細君の戀 |
| 第九 内儀の戀 | 第十 嬢の戀 |
| 第十一 後家の戀 | 第十二 外妾の戀 |
| 第十三 令嬢の戀 | 第十四 女學生の戀 |
| 第十五 町娘の戀 | 第十六 下婢の戀 |
| 第十七 藝妓の戀 | 第十八 娼妓の戀 |
| 第十九 都會と田舎 | 第二十 婦人戀愛概説 |

葛城天華君著
岡 落葉君畫

正價金廿五錢
郵税金四錢

女義太夫の裏面

(寫眞版挿入)

女義太夫の裏面を描きて **周密精細**、諸君はその意外に驚きうの墮落に愕くべし。

著者多年 **探索の結果** 此に本書を著はして、世を警醒せんといす

附録には、小説的の短篇、**女義太夫の人名表、語物一覽表**を添す。

原田東風君著
岡 落葉君畫

正價廿五錢
郵税四錢

社會の裏面 乞食

第一編

乞食とは何ぞ **最下級** に位するや、生活程度の **遊民** なる、社會の風教上最も忌むべき **遊民** 文明の世最も醜きもの、一團體をなして活動せり、**交際** 間にも **戀愛** あり、**教育** あり、**放蕩墮落** 然るは如何、不具癡疾、**不幸災害** の然らしめし乎、**實地踏査** 親しく著者 **實地踏査** の後に成る

岩崎徂堂君著岡落葉君畫

田中正造奇行談

肖像筆蹟入 (再版)

正價廿五錢
郵税四錢

明治の佐倉宗五郎 **誰ぞ**

鑛毒問題 **誰ぞ** 十年一日の如く狂奔盡瘁せる田中正造翁其

人なり翁が行 **熱血の餘** に出で墮動たる總て **熱血の餘** 落社會に

在ては寔 **模範** たるものあり本書は翁に人の **模範** か幼時より今日に到る

逸話奇行 **近時有益の書なり。**

東臺隱士著 岡落葉畫

名士の交際術

正價廿五錢
郵税四錢

本書は田中正造、佐藤鬼少將、江木衷、北垣男爵、久保田讓、高木辯護士、平岡浩太郎、大隈伯 **現今有名の** 爵、頭山滿、其他 **現今有名の**

人士 **應接** せられたるか如何に **應接**

し如 **談話** するか **訪問し實見**

極めて **寫實的評論的** の筆を

きたるもの、一讀 **面目躍如** とし

現し宛然讀者自身名士と談話する感あり、

原田東風著 岡落葉畫

暗黒の青年時代

正價廿五錢 郵稅四錢

恐る可^い警^めむ^{べき}は青年時代なるかな。惡

魔^耳に妖鬼^袖を惹く、郷關を出つ

固なるや歸郷果して幾人か錦繡と纏ふ

や、吁、暗黒なる前途に光明

を認^め 一道の活路を得んとする

に依^り準備せよ警戒せよ、

押川春浪君著 岡落葉君畫

世界怪奇譚 第三編

空中大飛行艇

正價廿五錢 郵稅四錢

春浪君の著 愈々出て愈々奇

なり、「奇人の旅行」は膽豆の如き小人輩

を驚かし「世界碧眼豚尾」の膽を

武者修行」は「空中大飛行艇」

「空中大飛行艇」世界万国に驚か驚

に至つては「新發明」をやりし輕

るものあらんや軍艦また必要を見

空中大飛行艇の依る行文流暢肥

戦は正に空中大飛行艇に依る行文流暢肥

事の快例の如し、

原田東風君著 小山榮達君畫

木賃宿

正價廿五錢 郵稅四錢

社會の暗面先づ下層の生活を

研究す可し下層の生活を探らんと

最も適切にして複雑なる木賃宿を観察す

るを便とす木賃宿の活寫はよく社會の罪惡

亂調病源を指摘して餘蘊なから

に非ず著者苦心慘膽の處唯その

密なる觀察に止まらずして活寫の筆法に存

する又一部の好小説

原田東風君著 岡落葉君畫

貧民窟

正價廿五錢 郵稅四錢

勞働問題、社會問題、風俗宗教

等、に力を盡しつゝ、あ

る人士は第一に貧民窟の現状に精

通せざる可から空論の喧々たるに

比してこれが状態生活を寫したるの書甚だ少し

著者これを慨し親非常の苦心

を以て本書を作らる行文極めて趣味あり

彼の徒らに統計的記實的のものと同一の

比に非ず、

木村鷹太郎君著

パイ文界の大魔王

正價四
十錢郵
税六錢

色刷寫真版數葉挿入

本書はパイ
ロン卿が **幼時より終焉** に
るの生涯次を逐
うて精細その **性格の戀愛** のそ

文字 その **思想** 悉く叙説
し評隲し **眼光**

炬 の如し狂熱詩人が
の如し狂熱詩人が **筆勢火** 面貌活躍して、吾
人が面前に髣髴たらんとす寔に寂寞たる

文壇 の **一道の活氣** を興へたるも
のと言ふ可し

與謝野鐵幹君著

新派和歌大要

正價廿五錢
郵税四錢

本書は鐵幹君が多年の間初學者の爲め、

親切叮嚀 を旨と **註釋、評**

論、説話 をすべた **新派和**

歌 に關する著作を蒐録
したるもの、實に **歌壇の**

珍 と稱す可し、

豪傑叢談

洋裝 全 部 拾 冊 正價拾五錢 郵税貳錢

第壹編 宮崎來城君著 **多情の豪傑**

第貳編 宮崎來城君著 **豪傑の臨終**

第參編 宮崎來城君著 **豪傑の少時**

第肆編 岩井松風軒著 **豪傑の遺訓**

第伍編 宮崎來城君著 **豪傑の雅量**

目次左の如し
○源朝朝○源朝經○平重衡○木曾義仲○曾我
祐成○楠正行○藤原藤房○高師直○尊良親王
○高師秋○新田義貞○新田義興○平兼盛○柴
田勝家○平維盛○豊臣秀吉
豪傑の氣象は臨終の間に於てこれを見る、來
城子獨擅の健筆を振つて無數の古豪傑が臨終
を描く一讀惻夫も起つ可く鬼神も泣くべし
蛇は三寸にして人を呑むの慨あり、豪傑の豪
傑たるはそれ天品に依るか又聞く大器晩成の
語あり豪傑の豪傑たるはそれ鐵練に依るかこ
れを知らんと欲せば須らく豪傑か少年時代の
言語舉止に徴せよ
創業は易し守成は難し、英雄の苦心はその子
孫の業に在り、遺訓を遵守するもの以て榮へ
背戻するもの衰ふるは歴史に徴して明なり、
有爲の青年なるもの一冊を座右に置いて朝夕
の鑑とすべし
諸豪傑が亂世に於ける慣用手段たる權謀術數
以外に一種の天真潤達なる襟度を以て人を迎
へたる絶好の逸話、茲に例の健筆を以て寫し
出されたるもの一讀光風霽月の想あらん

博言博士イーストレーキ君著 英作文添削詳解

再 正價廿三錢
版 郵税二錢

「イ」氏門生の英作文數多を撰擇して、字々句句に以て添削を加へ、其全文には全體の評論を下し、以て理由を解説したる英學界未曾有の珍書なり。

博言博士イーストレーキ君著 英和 日用單話自在

第三 正價參拾錢
版 郵税四錢

英米日用の慣用語句一千數百を集めて之を二十種に類別し、同氏自ら正確の發音を施し加ふるに未尾に單語數百をも類別に附しあれ、初學者は勿論特に中學生産者も必須の良書なるべし。

菅野德助君著 フランクリン 自叙傳詳解

再 正價參拾錢
版 郵税四錢

國民英學會講師として「實用英語」記者として英文の註釋を以て芳名噴々たる菅野氏が其精緻なる頭腦により詳密の註解を下せしものなれば坊間流布の書籍の香と其の選を異にするは勿論實に中學生必携の書なり。

文學士宮本正貫君序 虎城山人編 作文 助字用法詳解

四 正價十五錢
版 郵税貳錢

●也、矣、焉、乎、哉、耶、耳、爾、已、殆、幾、蓋、夫、抑、●即、乃、故、即、便、●猶、尚、仍、等、の助字數百を類集し、各字の意義、用法、異同等音實例を舉げて詳説せり。

侯爵西園寺公望君題字 岡鹿門君序 財閥榮君編 作文 熟語成句詳解

四 正價廿五錢
版 郵税四錢

故、熟語數千を集めて、之を精密の電氣、文字の出處、故事來歴を詳説して、之を一別一別にし、尙ほ索引に便なる爲め種類目録をも付し、別別引用に便にして、文筆に従事せるもの座右必須の要典なり。

文學士宮本正貫君序 虎城山人編 漢文 和文漢譯秘訣

正價十五錢
郵税貳錢

和語を漢語の語勢に變更する練習法なり。復文十數例を一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、の十種に分ち、一字一字詳説し、又譯文の異同を識別し、譯文の運用の和文漢譯例を示し、譯文の方法秘訣を詳説せり。

法學士 加藤正雄君序 南海道人編 (插畫三十二個) 書法 習字速成圖解

再 正價十五錢
版 郵税四錢

本書は永字八法、草字體法、一文字五形修練術、忍返筆、姿勢、習字、四修、習字、文學之體、筆勢、筆拍子、去帝、柳公權、東坡等の書法極意より舊體の種種、筆道の用具に到るまで詳細不漏。

涵養社編纂 現代 青年の憲法

三 正價廿錢
版 郵税四錢

如何にせば成功すべし乎、諸部幾萬の學生が日夜奮勵する問題に不幸にして往々解決せざるものあるは、何ぞこれ精神を顧みずして形式を學べばなり、本書は、大に此等の青年教育に本會獨得の取事なり。

宮崎來城君著 岡落葉君筆寫真版數葉入

乞食旅行

正價廿五錢
郵税四錢

腹に高登の書を貯へながら旅行のしたまに鉄板を片手に乞食の仲間入りして彼處此處と經過つた境に手ある三日のうちに止められぬと無銭の境に過はどその趣味の多い事を悟るてあらう

矢野滄浪君著 寫真版挿入

無銭旅行 食客

正價廿錢
郵税四錢

本書は著者が實踐せし事柄を言文一致を以て描かれたるものにして食客が辛酸困苦の境遇不平憤懣の活讀むのたをたして身客の中比して趣味を起さむるに近時片々たる其學の衛生に慰樂を興ふることも甚多しのみならず其學の衛生に慰樂を興ふることも甚多し

巖谷遯山人著 生田葵山人著

少年 少英雄

寫真版數葉挿入
正價廿五錢
郵税四錢

生田葵山人が少年小説に獨得の筆を有するは既に文壇の公評たり此書は山人が田園生活數ヶ月間に於ける苦心經營の作數篇を蒐めたるものにしてその主氣は如何勇氣の作數篇を蒐めたるものにしてその好伴侶たる年譜が敬慕する所なるか試中の

原田東風庵著 小山榮達君著

木賃宿

正價廿五錢
郵税四錢

社會下層の狀態を描いて精細、初くも貧民問題勞動の實に關して露骨するの士は一讀せざる可からざるの書なり社會の暗面を露ぼし人々を最も適切なる參考書なり

12/1/26

長田偶得君著 岡落葉君書 三版

逸事 明治六十大臣

正價廿五錢
郵税四錢

明治十八年内閣制度改革以來今日に到る迄の大政六十年の逸事奇談を撰きたるもの大體服きて威儀嚴然たる大臣は横身一杖の裸男となりて讀者の前に現れる可し

岩崎徂堂君著 岡落葉君書 三版

中江兆民奇行譚

正價廿五錢
郵税四錢

明治の奇男兒中江兆民居士が奇行奇行を描きたるもの滑稽あり嘲罵あり諷刺あり狂態あり一讀巻を捨つるに及びす

押川春浪君著 岡落葉君書

世界怪奇談 奇人の旅行

正價廿五錢
郵税四錢

世界怪奇譚の第一編として著者の尤も苦心する所は尤も趣味多くして有益なる書なり

押川春浪君著 岡落葉君書

怪人奇談

正價廿五錢
郵税四錢

表紙に人目を驚かすより見て如何に記事の奇怪なるを推想するに足らん人外狂奇狂士の戰場の花々詩趣ありて讀者をして飽く事を知らしめず

緒方流水君序 石橋玄潮君著

新體詩指南

正價廿五錢
郵稅四錢
新體詩の性質を明にし、其作法を詳説し、附する語之が模範たる作例と、之を組織すべき資料たる類に於て何れにか之を求めん、新體詩自修の指南車は本書を措

石橋玄潮君編

韻花天月地

正價廿五錢
郵稅四錢
本書收むる所は當時有名の新體詩人の作にして其華を抜き其精を選ひて之を集む、其致七十有餘、類に是れ四時花鳥風月の友天地の有情を教ふるものは即ち之なり、

文學士栗田木岡君序 渡邊幾石君編

美文美辭麗句

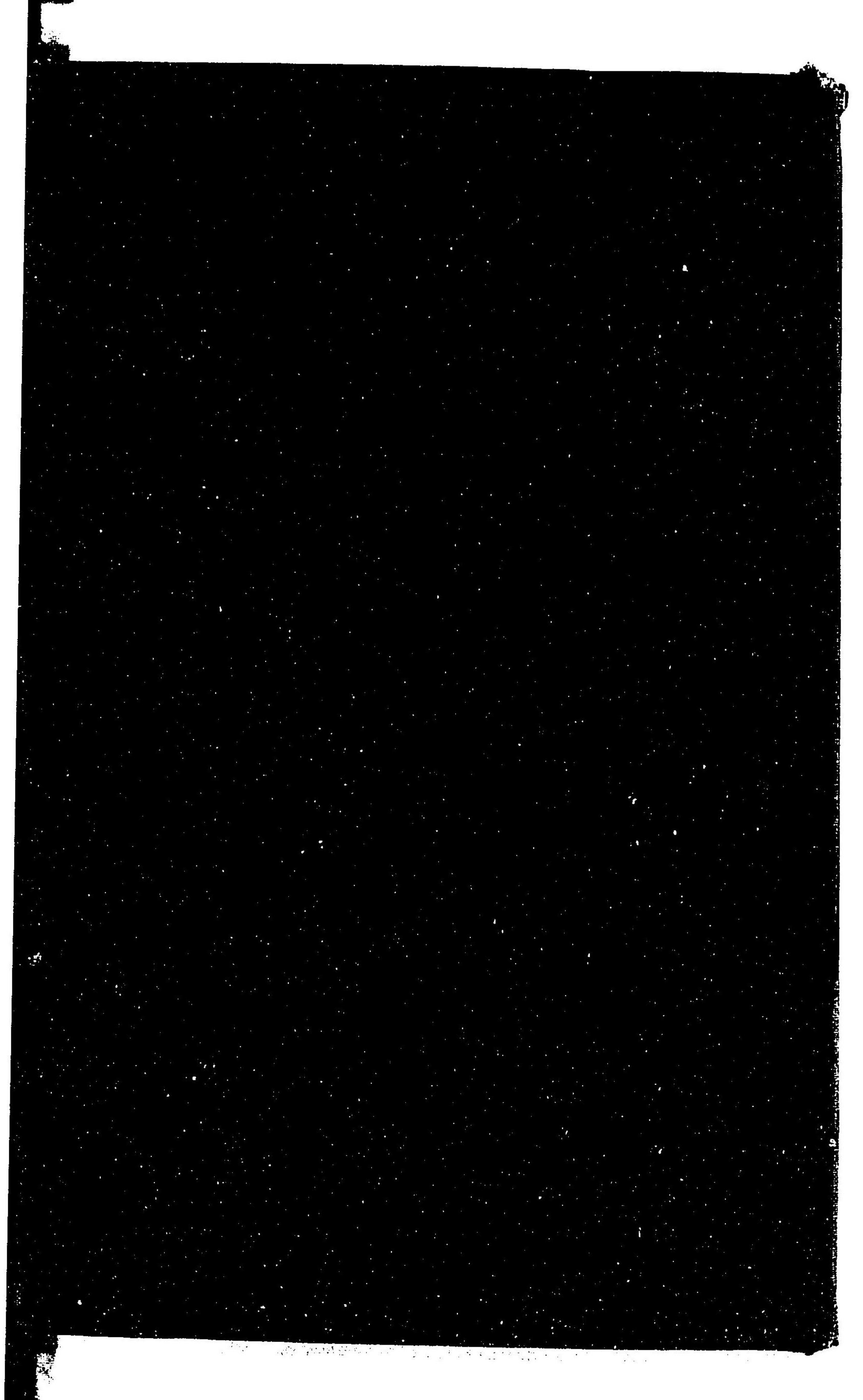
再正價廿錢
郵稅四錢
本書は部門を季候(春、夏、秋、冬)地理、天文、人品、品性、人情及人事等に分ち更に百有餘の細目に分ち以て索引の便を計れり、選し作文の好資料にして苟しくも文筆を弄するの士が座右の友として裨益少なからざるを信す、

國府犀東君序 香川怪庵君述

文士政客風聞錄

正價拾五錢
郵稅貳錢
方今其名噴々たる政治家、文豪が研話珍聞を蒐めたるもの、滑稽あり、洒落あり、豪放あり、奇矯あり、風流あり、慷慨あり、面目躍如として紙上に活躍す、

96
46



96
46

Ⓜ

023067-000-2

96-46

野宿旅行

鐵脚子 / 著

M35

ADB-1072



